

「当たり前支援学校」が必要だ

北海道高等盲学校 教諭 杵澤 整治

昨年度に10年経験者研修を受講しました。たった10年ですが、この10年の間に、教育界は、特殊教育から特別支援教育へと変化を遂げ、さらにはインクルーシブ教育システムの構築へ向けて動き出しています。

私は、特殊教育や特別支援教育の特徴は、ひと言でいうと、「個別化」であると考えています。幼児児童生徒、一人ひとりに合わせて「個別の指導計画」を作成し、教育活動を展開していくというのは、特別支援教育の大きな魅力です。

ただ、「個別の指導計画」というのは、とても大切なのですが、「個別」という言葉が誤解を招いているとも感じています。

それは、マンツーマンや少人数で指導をすれば幼児児童生徒は成長すると考えられてしまいがちであるということです。もちろん、私も、マンツーマンの指導が、時には、非常に効果的であることは理解していますし、実感もしています。ただ、あまりにもそのことを保護者が求めているような気がします。

盲学校は、この10年間で、生徒数が大きく減少しているため、自動的に、マンツーマンや少人数指導になってしまっているのですが、次のような問題が最近見られます。(盲学校は、通常学級と同様に教科を学習する、いわゆる準ずる教育課程があります。)

小・中学部では、個別に指導され、教科学習での積み重ねを実感し、自信を持って高等部に進学することになります。一方で、高等部には通常学級からの生徒も進学してきます。その多くは、教科の学習に対して自信を無くして入学してきます。教育相談においても「こんな学力で高校の学習に着いていけるのか」という不安を漏らします。

ところが、実際に高等部で一緒に学習をしてみると、通常学級から進学してくる生徒の方が学力が高いのです。

個別に指導されてきた生徒よりも集団の中で指導されてきた生徒の方が学力が高いというこの事実、私たち特別支援学校の教師はしっかりと向き合わなくてはなりません。

この問題がなぜ、生まれてしまうのでしょうか。

これは、現在の特別支援学校(とりわけ盲学校)が「学校完結型」に陥っていることが挙げられます。このことは10年前から言われていますが、結果として抜け出せていないと思います。私も10年間、盲学校での教育に携わってきた教師として反省しています。

そこで行われている教育活動の時間が、学校内という限られた中でのみ通用する学力であったり、学校内のみで完結してしまう生活する力の伸長に費やされてしまっているのです。

世の中は、グローバル化の時代です。若者がどんどん世界へ出て行く時代において、特別支援学校の教育は個別化によって、どんどん内向きになっていないでしょうか。

特別支援学校が「特別性」を出せば出すほど、言い換えれば、「個別に指導します」「特別な教育をします」と言えば言うほど、特別支援学校は、社会と大きく遊離していく気がしてなりません。

「世の中の当たり前をしっかりと教えるのが当たり前」、「障がいによって苦手なところやできないことがあるのなら、それに配慮するのは当たり前」、「社会に参加することを前提に指導するのは当たり前」

「特別な支援」ではなく、「当たりの指導・支援」を行える「当たり前支援学校」が必要であり、「当たり前支援教師」になるために、私は努力します。